平成29年（2017）
阿づまの光
6月号・Jurio

教主さまお作　灰釉茶盌 銘「喜界の海」

【宮原山土　金字松釉】

題字 出口直日

通巻第579号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

命まで道にささぐる心あらば
如何なることも叶はざらめや

出口王仁三郎聖師

ご神業奉仕の心とは

大本本部長　浅田秋彦

「神は人民を道具に使うて致さねば、神の姿のままでは現界の立直しはできんから、神が憑りて致すから、この大本へ引き寄せられた人民は素直に致して、神の申し付けることチット無理じゃと思うても、人民では分からぬ経綸であるから、神は親であるから、無理いう親に仕えると思うて辛抱して御用を聞いてくだされ・・・」（『いづのめしんゆ』大正八年一月二十五日）

私たち信徒は、神さまの手足として神第一の精神で働かせていただいているつもりが、知らぬ間に自己第一、感情第二の精神となってしまいがちであります。

ご神業の実務に携わっていて、神さまのみ心に叶っているかどうかを一々判断することは難事ですが、気持ちが神さまに向いているときは明るく、前向きに、素直な気持ちで仕事に携われます。ある時は、自分と反対の意見を押し付けられ、無視されることもありますが、それでも、自分に我欲がないか反省し、正しい意見ならば時が解決してくれます。自分に与えられた仕事に対して夢を描き、その夢に向かっていろいろ工夫をし、困難を乗り越えていくことが楽しみとなるものです。

尊師さまは、

「一切は神のみ心である、み旨である、と一々に感謝して、あるままに、成るままに、恨まず、そねまず、ただ自己の非をあきらかに非として、神のみ前にお許しを乞い、その時その時の仕事に懸命の努力を払うよりほかに道はない」（『信仰覚書』第五巻）

また、教主さまは、

「自己心、自我心を取り払い、慢心、取り違いのないよう、神さま第一に祈りつつ、清らかな明るい心で進ませていただけば必ず道は開けてまいります」（平成十八年大本開祖大祭ご挨拶）

とご奉仕の心をお示しくださっています。

出口なおの預言

～世界の大峠と立替え立直し～

出口なお開祖の預言の要諦は「世の立替え立直し」であり、「神の理想世界の実現」です。それは今から120年以上も前に発せられました。混迷を極め、想定外のことが次々と起きる現代はそれに至る「大峠」なのです。開祖の預言からわたくしたちの生き方を考えます。

大本の開教と〝お筆先〟

大本は明治25年（1892）旧正月、節分の夜に「艮の金神」が、教祖・出口なお開祖に神懸り、現在の京都府綾部市に開教しました。開祖の口を通して発せられたお言葉は、後に筆を通して書き記され、これを「お筆先」と呼んでいます。和綴本で1万巻、半紙20万枚にも及びます。

全文ひらがなだったお筆先に、もう一人の教祖・出口王仁三郎聖師が漢字を当てて、大正6年2月から大本の機関誌「神霊界」に順次発表されました。これが「大本神論」です。

神論、神さまの一番訴えたいことは「世の立替え立直し」です。今の世は、神は忘れ去られ、人の世でもなく、モノ、金、力の世の中になっている。このままでは世がつぶれてしまうから、人の心を改めて、神さまのみ心に叶う「みろくの世」を樹立するとの宣言です。

「三ぜん世界一同に開く梅の花、艮の金神の世に成りたぞよ。梅で開いて松で治める、神国の世になりたぞよ。日本は神道、神が構わな行けぬ国であるぞよ。がいこくはけものの世、強いもの勝ちの、悪魔ばかりの国であるぞよ。日本もけものの世になりて居るぞよ。是では、国は立ちては行かんから、神が表に現われて、三千世界の立替え立直しを致すぞよ」

これが初発の神諭と呼ばれるものです。ここでの「がいこく」というのは、単に「外国」のことではなく、神さまから遠ざかった考えという意味です。「物質本位」と書いて「がいこく」とふりがなをふっているところもあります。

初発の神諭はさらに続きます。

「用意を成されよ。この世は全然、新つの世に替えて了うぞよ。三千世界の大洗濯、大掃除を致して、天下太平に世を治めて、万古末代続く神国の世に致すぞよ。神の申した事は、一分一厘違わんぞよ。毛筋の横巾ほども間違いは無いぞよ。これが違うたら、神は此の世に居らんぞよ」

非常に格調高く、神の言葉に、絶対誤りがないと力強く言い切り、「大本神論」の権威というものを神さまが明らかにされた感がいたします。

ですから、開祖にとってお筆先のご用は命がけでした。自分の神懸りによってもたらされる言葉に、少しでも誤りがあったら、結果として「人々をだましたことになる」からです。

極寒の日でも水ごりをされて

そのことを出口すみこ二代教主は、「教祖さま（開祖のこと）がお筆先をお書きになるのは全く命がけでありました。教祖さまは神さまに、『神さま、あなたこんな事を書かしなさるが、もし違うたらどうしてくださる。私はそんな事になれば世間をだましたことになって、生きておることも死ぬことも出来ませぬ』とおっしゃると、神さまは『直よ、書いて置けよ。滅多に違いはせぬぞよ。もし間違うたらこの方の生き首をやるぞよ。これが間違うたら神はこの世に居らんぞよ』

『お澄や、わしがお筆先を書くのは神さまと首の取りやいをして、命がけで書いとるのやぜ』とおっしゃった」と示しています。

開祖はお筆先をお書きになるときは、どんな極寒の日でも水ごりをされ心身をお清めになってからお書きになりました。ご晩年は神さまが開祖の体を心配されて、水ごりをお止めになりましたが、それでも額にお水を頂かれてからお筆先をお書きになりました。

最初はお筆先が読めなかった開祖ですが、ご晩年は読めるようになっておられました。書いてあることが分かりだすと、そこにご自分の気持ちが混じってくるのを開祖は大変心配されました。その様子も史実に残っています。

開祖の疑問に対し、神さまは「直よ、それでよろしいのだ。この方の考えるところは、すなわちその方の考えるところ、その方の考えることは、とりも直さずこの方の考えるところで、その方とこの方との考えに一分の隙もなくなっているのじゃ」とおっしゃったといいます。まさに大本で言うところの「神人合一」の状態であられたと思います。

聖師が漢字を当てた〝神諭〟

一方、王仁三郎聖師は「大本神論」について、「神諭は天地の初発より数万年の後のことまで、いわゆる過去、現在、

～21世紀・生きがい講座～

猪子　恒（大本東京宣教センター次長）

未来に渡る事柄が出してあるのですから、容易に見当のとれんものであります。預言的のものもあり、警告的の諭しもあり、いろは仮名字ばかりでわれわれごとき小智短才者の容易に窺知することのできぬ難解のものであります」と記しています。

そこで、少しでも意味がわかりやすいようにと、漢字をあてて発表しました。例えば《われよし》の言葉に「利己主義」、《つよいものがち》には「弱肉強食」と《がいこく》には「邪神」「体主霊従国」などを当てています。

こうして漢字を当て、活字の機関誌を発行することによって「大本神諭」が知識層に広まり、信徒もどんどん増え、田舎の小さな一教団が、日本全土に広がっていきました。

「今」が、みろくの世へ向かう大峠

京都府綾部市の聖地・梅松苑に「長生殿」という大本の神殿があります。これは王仁三郎聖師が、「長生殿立ち上がりたる暁は神の経綸も漸く成らむ」と詠んだ建物です。過去に2回建設を試みましたが、大正10年と昭和10年の大本弾圧でいずれも完成を見ることのなかった、大本にとって悲願待望の建物でした。

その長生殿は、苦難を経て開教100年を迎えた平成4年に完成しました。出口聖子四代教主の時代です。四代教主は長生殿完成後、「今はみろくの世への移行期、いわば産みの苦しみの時期で、長い長いトンネルにさしかかったようなものです」と述べ、「みろくの世に向かい、峠にさしかかった」と示しました。

これについて出口紅五代現教主は、「世界は今、ご神諭に厳しく示されたとおり、みろくの世に向かってどうしても越えなければならない大峠の真っただ中にあります」と、「今」が、みろく世に向かう大峠であると述べています。

誠の神力でないと

神諭には「この世の立替え致すには、学でも利巧でも、智慧でも、金銀でも、法律でも行かんぞよ。兵隊斗りの力でも行かず、今の政治の行り方では猶行かず」云々とあります。

「学」というのはいわゆる人間の「理知」です。「神と学との力比べ」との神諭の通り、神さまからすれば、やはり人間の知恵や力だけでは、この世は立ち行かないのです。

「智慧でも学でも金銀を何程積みておりても、今度は神にすがりて誠の神力でないと大峠が越せんぞよ」とあり、まさに現代の行き詰りは、そのことが人類に問われているのではないかと思います。

また神諭には、

「金銀を用いでも結構なお地上から上がりたもので、国々の人民が生活るように、気楽な世になるぞよ。衣類食物家倉までも変えさして、贅沢な事はいたさせんぞよ。世界中揃うて喜ぶ様の政治にいたさねば、神国とは申されんぞよ」

と、贅沢を戒め、本来のみろくの世の具体的な姿として「お土、自給自足」を明言しています。

しかし、それまでに越さなければならない大峠について、出口直日三代教主のお言葉を紹介し、まとめとします。

自分自身を練ること

「これまで、神さまが筆先に示されたとおりに間違いなく現われているのをみるとき、〝世の大峠〟は何時かはあるものだとおもっています。それをただ待つように、その時期が何年先とか、何十年先とかいうような気持になれないのです。その言葉が、無始無終に生きとおしの神さまのみ心から『立替立直しが迫っている』というのと、わずか百年内外の生命しかない人間の生涯から割り出して『迫っている』と感じるのでは、同じ『迫っている』ということでも、それを計る尺度に、大きな違いがあるでしょうし、また、障子一枚外のことが判らない人間に、その時期などがハッキリ判るはずがありません。神さまだけが知っていられることと思います。

ただわたしは、『この秋は雨か嵐か知らねども今日の務めに田草とるなり』の歌のこころで、日々をつつましく、楽しく、学び、働かしてもらいたいとおもいます。わたしの生存中に、そのような時期がくれば、驚くかもわかりませんが、少しでもあわてふためくことのないよう、自分自身を練ることに努めたいとおもっています」

まさに「先行きの不透明な時代、現代」にあって、このお示しをもとに、日々の生活を送らせていただきたいと念じています。

掲載文は、平成29年1月18日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

東光苑月次祭

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭は、5月14日午前10時30分から、斎主・高野春樹祭務課長のもと執行され、301人が参拝した。

祭員は茨城主会、伶人は二絃の会関東支部、伊都能売神諭拝読を福井温彦埼玉主会長が、添釜は宇野社中が担当した。

祭典後、教主さまのみろく大祭ごあいさつを拝聴。続いて本部を代表して高野春樹祭務課長があいさつを述べた後、司会が人事異動（4月15日付）に伴う東京本部職員の着任者、離任者を紹介した。（左下に挨拶文掲載）

また、合唱団・東京主会「あづま」による愛善歌「悠久」（エスペラント語）、茨城主会「AKPイバラキ」による愛善歌「神恵（みめぐみ）」が奉納された。

企業繁栄祈願祭

第35回企業繁栄祈願祭は、4月23日午前10時30分から執行され、68人が参拝した。

祭典は祓式行事、大神奏上に続いて、斎主・高野春樹祭務課長が市杵島姫命さまに「企業繁栄祈願祭祝詞」を奏上。全国から申し込まれた、176社の企業名を読みあげ、世界経済の発展と繁栄を祈願した。次いで、各企業の代表者が玉串を捧奠し、一同で「神言」を奏上、讃美歌を斉唱した。

祭典後、猪子恒東光経友会代表幹事（東京宣教センター次長）があいさつ並びに「商いの家に生まれて」と題して記念講話。信仰と企業努力によって成功した3人の事例を紹介。「資金の小さいところから発足したのが成功する」との三代教主さまのお示しを引用しながら、「こつこつと誠実に務めることが商売の秘けつ。同時に、世のため人のため、神さまのために働かせていただくという姿勢が大切」と語った。

斎主が水運や経済を司る市杵島姫命さまに、世界経済の発展と申込各企業の繁栄を祈願。参拝者は玉串捧奠の後、真剣に神言を奏上した

21世紀・生きがい講座

第171回「21世紀・生きがい講座」は、5月17日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、鈴木林太郎総務部総務課主事が「今を大切に生きる」～幸せをみつける法則～と題して講話した。参加者は30人（内、一般7人）。

講師は大本四大主義の一つ〝楽天主義〟について「楽天とは天命を楽しむという意味があり、大本では天命を知って人事を尽くすのが本当のあり方だ」として、「人は逆境を順境に導くため、また向上するために努力して、初めて神さまからのお神徳をいただくことができる。幸せをみつけるひけつは、感謝と努力の生活の中にある」と語った。参加者からは「自分について見つめ直す大きなきっかけとなった」（男性・一般）等の声が寄せられた。

みなづきの集い
～関東在住信徒研修会～

日　時	平成29年6月25日（日） 午前9時（受付）～午後4時半ごろ
会　場	東京宣教センター　　参加費　1,000円 ※昼食1回・資料代・記念写真代含む 但し、家族2人目から500円 ※期間外の食費・宿泊費は別途となります
定　員	40人 ※希望の方には宿泊のお申し込みを承ります
持ち物	筆記用具 ※宿泊される場合は入浴・宿泊具などをご持参ください
内　容	茶席入席・お作品拝観・浄書 講話「二度の弾圧を乗り越えて」 講話「喜び勇んでご用に」 ビデオ鑑賞「この世の向こうに」 歓ぎの座・総合質問会、等
締　切	6月19日（月）
申込先	東京宣教センター・愛善宣教課

●離任あいさつ

総務管理課長　藤本（ふじもと）　光（ひかる）

このたび綾部祭祀センター総務管理課へ異動となりました。4年9カ月、また以前の勤務も含め、14年3カ月の長い間、関東教区の皆さまには本当にお世話になりました。

綾部のご奉仕は全く初めてで、すべて一から学びたい思いです。最後に皆さまのご多幸をお祈りし、聖地でお会いできる日を楽しみにしています。

●着任あいさつ

総務管理課　松田（まつだ）　達子（さとこ）

4月25日に着任しました。明るいご神前で朝夕拝をさせていただき、穏やかな空気の中でご奉仕させていただいています。

東京本部の中で過ごしていると、大都会にいることも忘れるほどで、やはり神さまのいらっしゃるところなのだなと感じています。

皆さまに親しみを持って接して頂けるように、努めてまいります。時には厳しくご指導いただけましたら、ありがたく思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

東光苑祭典・行事予定

6月

11日（日）午前10時30分
東光苑月次祭・人類愛善会創立記念祭典・市杵島姫命例祭

21日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（新橋・航空会館）
講題　王仁芸術
～耀盌にみる王仁三郎の世界～
講師　尾﨑泰良（大道場講師）

25日（日）午前9時30分（9時受付）
みなづきの集い（関東在住信徒研修会）

7月

9日（日）午前10時30分
東光苑月次祭

19日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（新橋・航空会館）
講題　大本の宗際化活動
～宗教の壁を越えて～
講師　奥脇俊臣（国際愛善宣教課員）